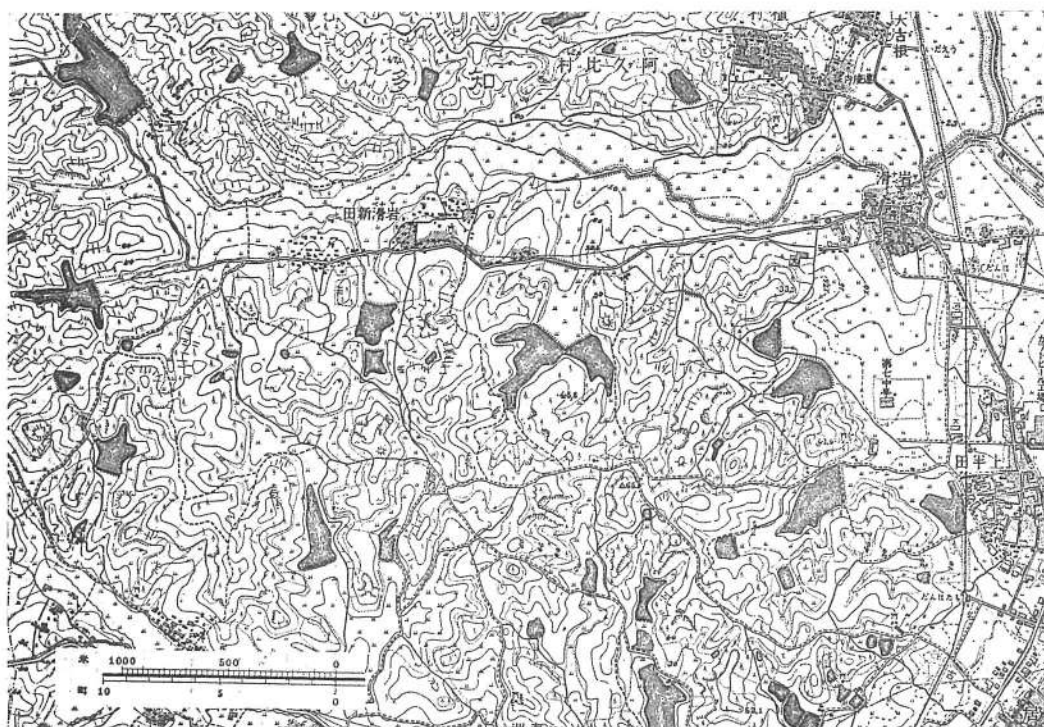


第一章 知多農民の悲願

1 旱魃かんぱつの怖さにおののく

日本のまん中、伊勢湾に突出した知多半島は、温暖な気候に恵まれ、また名古屋に近くて、交通の便もよく、その上、人々は勤勉で、古くからこの地を愛し農業に励んできた。しかし、夏の雨が少なく、降っても雨は馬の背を分けるかのように海に流れてしまつて、大きな川もなく、毎年のように旱魃かんぱつに悩まされてきた。そのため長い間、大小さまざまな溜池たらいけを谷間谷間に造つて灌漑かんがいにつとめてきた。その数は、尾張東部から知多半島にかけて一万三千余個が、あたかも豆をばらまいたように造られてきた（日本三大溜池地帯の一つに数えられた）。これは千数百年前、日本の国に稲作が伝わつて以来の地域住民の汗と涙と血の結晶であつた。その溜池にも年によつて秋から春にかけての雨の少ない年には満水せず、田植え水にも困つた。また、無事田植えはできて、夏の雨が少なければ、せっかく植えた稲も青立ち（時期がきても穂が出ない）となり、稔らない。

ところが、知多半島から境川、衣浦湾を隔てた三河で江戸後期に和泉（現・安城市）の都築彌厚翁（地域一番の醸造家）が、矢作川から水を引いて、安城ヶ原の小松林を美田に変えよ



半田市西北部の灌漑用溜池分布状況

うと石川丈山の協力を得て計画を立てたが、志半ばで破産、中断してしまった。明治の世となり、中断から六十五年、伊与田与八、岡本兵松らによって三年にして用水を完成（明治十三年）、小松林を美田とし、その後、日本のデンマークと称されて名声を誇っている。

これを見た富貴村の村長で郡農業会副会長の森田萬右衛門は、多年自村の別曾池改修など、殖産興業につとめてきた経験から、知多半島にも、三河の明治用水のように、木曾川から水を引き、用水を造り、農業を根本的に改良すべきであると機会のあるたび



森田萬右衛門の像
(武豊町役場富木支所内)

ごとに青年男女に話した。氏の多年にわたる溜池・水路の改良など土地改良事業で実績をあげてきているから、聞く青年達も、単なる夢物語とは思えず、傾聴した。夏になれば山田の水汲みに明け暮れていた久野庄太郎青年もこの話を直接聞いたことがあり、いつの日か、そんな夢を実現したいと心に誓っていた。

2 戦前の用水運動

日本の国は、徳川時代三百年の鎖国の歴史が破れて、明治維新となったが、当時、世界の列強は富国強兵、植民地獲得に狂奔しており、朝鮮半島はロシアの脅威にさらされ、中国は列強が勝手に奪い合うような危うい状態にあつて、日本もこのままではいつ列強諸国の餌食となるか知れない状況にあることを知った。明治時代になって国内の治安がおさまると、諸外国の軍国主義をまねて大陸進出を志し、日清・日露の二度の大戦を経て国内の治山治水、産業振興には充分手が廻らなかつた。国内における農業振興は農業会がその衝にあたり、市町村長が農業会長となつて、農業に熱心な篤農家を地区ごとを選び、農業技術者を置いて農業の振興につとめたが、その成果は期待するほどあがらなかつた。

国は帝国農業会が統轄し、農林省を支えて農業会長は代々農業界の大御所が座り、幹事制をとり、石黒忠篤先生などは、その最たるものであつた。

しかし、米、麦、養蚕を主体とした農業の生産にはおのずから限界があり、米価、^{まめ}繭価の下落で農村は不況のどん底の生活にあえぎ、東北の冷害地では稗、^{ひえ}粟、はては木の皮を食い、娘を売るといった悲惨な状況となつた所もあつた。

そこで、国、県においては、農業会が中心となり、産業組合をおこし、特産物を取り入れたり、水利事業をおこし、耕地整理事業を奨励して、農村の自力更生につとめたが、その成果は一部特定の地域のみにとどまっていた。

明治の終わりから大正の初めにかけて、河水統制といって、大河川の上流部に大ダムを建設して降雨時にこのダムに雨水を貯留し、下流の洪水を防ぐとともに、常時平均的にこの水を流して、発電、灌漑、上水道に利用することが考えられるようになった。このことは、水谷将著『日本河川論』にもべられている。

これを基礎にして愛知県土木部河川課の岩塚^{ひし}齊（あとになってわかったが、不老会常務理事だった村上悠紀雄の実兄）が、木曾川の上流の滝越、藪原、丸山に大ダムを建設し、降水時に約四億立方メートルの水を貯留して常時平均的にこの水を流下させ、木曾川の平均流量を毎秒一四〇立方メートル以下にならないよう計画し、発電、灌漑、上水道、舟航に利用する案をもっていた。この本を愛知用水運動に狂奔していた久野さんと私に参考になるだろうと、昭和二十三年八月末に貸してくれた。私はこの案に基づいて、木曾川下流の農業用水に迷惑のかからないよう、王滝川の上流にさしあたって一億立方メートルの滝越ダムを建設し、木曾川の水が必要量を下廻る時には、このダムの水を流して利用する計画を基礎とした。

すでに昭和十年頃、時の知事、篠原英太郎、県議会議長神戸真、同副議長奥村鉄三、内務省名古屋土木出張所長田淵寿郎（後年、名古屋市の助役になり、一〇〇メートル道路など戦後名古屋の都市計画の推進者として知られる）などによって、この案に基づき実際に計画された。とくに愛知県知事篠原英太郎は水没村藪原の出身で、県下の現地視察のたびごとに住民が早魃に苦勞している姿を見て、郷里の人達に藪原ダム建設を納得してもらい計画を進めようと努力

したが、藪原一村四八〇戸の移転の賛成が得られず、また、用水の利益を受ける地元にも、富貴村の森田萬右衛門のような篤志家も現れることもなく、事業が大き過ぎて、資金の見通しもつかなかった。これだけの大事業を短期間に完成させる技術も伴わず、事業は立ち消えとなってしまった。

ただ知多郡横須賀町（現東海市）の国会議員橋本僚太郎は病床にあつて、人脈も意見も反対側にあつた県議会議長神戸真を枕頭に呼んで、「木曾川疎水計画が何とか実現の運びとなるよう努力してほしい」と言い残して逝つた、という話を神戸真から直接聞いたと久野庄太郎さんは語つた。

これらの一連の資料は、紫の風呂敷に包んで岩塚さんから渡されたが、今、その所在はわからない。（特別郵便紙に毛筆で自身で書いたもの）

大正の終わりから昭和の初めにかけては、依然として全国的な不況が続き、会社の破産、銀行の取りつけ、失業、ルンペンが職と食を求めて東海道を西に東にさまよい歩き、世の中間いっただいどうなるかと心配された。

この時、日本はロシアに対抗して軍事大国の道を歩み、日本軍は満州において事を起こし、張作霖（旧満州地方の軍閥の総帥）の爆殺、柳条溝の鉄道爆破、通化事件、また国内では五一五事件、二・二六事件など軍によるテロ行為が次々と発生した（昭和三〇―三一年）。中国本土においては盧溝橋事件、上海事変と、中国との泥沼戦争はやがて太平洋戦争へと進み、緒戦の戦果に酔つて、自国の国力がどの程度であるかも知らずに、アメリカの圧倒的な軍事力によって戦争末期には本土決戦まで持ち込まれ、原子爆弾で終戦となった。

3 終戦前後の大旱魃

戦争末期から終戦前後にかけて、食糧事情の逼迫は農作業の中核となる中堅層の軍事召集、兵器増産による労力不足と、それに輪をかけるように、地震、旱魃、肥料不足、さらに空襲の激化で、日本人の生活は地獄のどん底に追いこまれたようになってしまった。

昭和十四年の旱魃

(大府市 浜島辰雄)

昭和十四年は春先から用水不足気味で、とくに夏から秋の初めにかけて、例年来襲する台風が小笠原の高気団の張り出しが強いため、ほとんどの台風が中国大陸を北上して中国北部、蒙古、満州、シベリヤへと流れて、日本本土には、七、八月の雨がなく、西日本、とくに中国地方、東海では、稲の出穂前の旱魃で、青立ち不稔の地域が多かった。

私(浜島)はその年の四月、南満鉄道株式会社調査部に入社して、内蒙古地区のダルハン(達尔漢)の牧場で新品種の緬羊と肉牛の改良、増殖のため、草資源の調査をしていた。大興安嶺の南の大草原の草資源は、その年の雨量に支配され、恒久的かつ永続的に草資源を確保するためには、第一松花江(スンガリ)の上流に広域な堰堤を造り、その水を遼河の方向に面状に広く導水し、草資源の改良をはかるべきで、地形的に白城子(松花江流域)上流からシラムリン川下流(尻なし河)の流域を通って開呂、通遼の方向に導水させる案を考えた。内蒙古の雨を呼ぶ祭に「ハラホト」の祭がある。これは蒙古語で黒い土という意味か、「雨よ、土黒く、草伸びよ」と祈る祭である。私は現地でハラホトの祭に参加、その願いを

効果的にするためには、貯溜した水を面として流す計画を「ペーパーロケーション」をして論文とした。これが後ほど、愛知用水計画の導水路の作成の際、役立った。

その年は前述のごとく、台風が中国大陸から内蒙古のシラムリン、ノモンハン地域に大洪水となって流れた。この時、ノモンハンで日本の関東軍と共同作戦をしていた内蒙古軍がソ連軍と戦闘に入り、ソ連戦車隊に追い散らされ、洪水の中を逃げまどうという治安の悪い中でペイロケ計画は、一生忘れることができない出来事であった。この雨が、大興安嶺から南に拡がる大放牧地域の水資源となっていたことがわかった。その年の十二月一日に名古屋の連隊に入隊を命ぜられ、十一月中頃、朝鮮経由、関釜連絡船で帰国の際、下関から山陽線の沿線の水田が早魃で稲は青立ちとなり、稲刈りをしていない田んぼが続いているのに驚いた。

日本列島の春から夏の雨は、赤道付近に発生する偏東風がフィリピン、台湾付近で陸地に突き当たり、北上反転し渦巻きを起こす。そして低気圧、台風の子となり、北緯三〇度付近から偏西風にのって小笠原高気団の縁辺を廻り日本列島に来るのが春一番、二番であり、夏の終わり頃から秋の初めに大型となるのが台風である。年により小笠原の高気団が強く、このモンスーン現象が中国大陸の奥深く進み、日本列島に来ない年が早魃年である。

このような年が二、三年に一度はやってくる。こうなると、雷雲も発生しない。一般に、地表や海面から蒸発した水蒸気は、二週間ぐらいで雨となって降るものであるが、日本列島には来ず、偏西風にのって流れて高緯度の方で雨雲を形成し、雨となって降るか、高気団に吸収され消滅してしまう。

日本列島の中で早魃の常習地（瀬戸内―中部地区―関東）では、しっかりした水源を持った



大府台地にも無数の溜池があった

用水を造り、積極的に灌漑効果を利用して増産を計るべきである。

昭和十九年の大旱魃

この年は、冬から春先にかけて雨が少なく、尾張東部から知多にかけての一万三千の溜池には田植え水も十分貯水できなかつた。

そのため田植え時期が来ても田植えをせずに、天を仰いで雨を待っていた。私はこの時、豊橋の陸軍予備士官学校の区隊長（陸軍中尉）から名古屋陸軍幼年学校の生物学、現地自活の教官として転任した矢先であった。小牧山の麓から篠岡村の下末まで自転車通勤して、通勤周辺は木津用水の受益地で田植えは順調に終わっており、郷里、豊明のことは気がつかなくかつたが、新聞で見て田植えにかかっていないことに驚いて、親父に電話して聞けば、雨を待って田植えをするんだと言っている。今日は六月二十八日、今に半夏生はんげしょう（次頁参照）がやってくる。

大変だ。半夏生半作という。土、日曜を利用して見舞いに行こう。実家は昨年兄（四十二歳）を失い、七十八歳の親父とあよめ 嫂が守っている。学校副官の許可をもらい自転車を出かけた。道は地図で予定線を定め、篠岡

から坂下、高蔵寺、尾張旭、長久手、日進、東郷、豊明と約八里（三三キロメートル）。まず篠岡から坂下の境の坂を登って行くと、峠近くの山田で婆さんが、真つ白に乾いた田んぼにこまざらいで田に穴を開けて稲の苗を植え、土をかけては薬缶で水を注いで田植えをしている。水は下の池から爺さんが肥桶で担ぎ上げてくる。私も驚いて立ち止まり、「大麥だなあ、婆さん」というと、爺さんが、「息子は二人、兵隊にとられて、供出と爺、婆の食うものだけは取らないかんでのお」と私の顔をながめて、どういふのんきな兵隊だろうか、いぶかしげな顔をしている。私も事情を話すと、「どこも同じだ。早く行ってやりな」とせかされた。途中、どの村も状況は同じ。水廻りのよい所は稲が活着して青々としている。大部分の広い田んぼが田植えができずに真つ白。早く行かねばと自転車に力を込めて豊明へと急いだ。豊明の大池は勅使池、若王子池だが、ここも田植えは終わっていない。父親も「困った困った」と言うばかり。どうしようもない。

これは大麥だと農業会長をしている従兄の三浦青一に会った。私の亡兄より二つ年上。今年四十五歳（当時）。「困ったなあ」「何かよい思案はないか」というから、道みち考えて来たことは、稲は短日性植物、夏至が過ぎれば幼穂形成を始める。苗代で幼穂形成はまずい。仮植えをすすめた。そこで彼は、興津の園芸試験場研究生出身で、果樹のことはわかると思っている、花芽の分化の理論から、稲の感光性について話し、短日性植物で、早生はとくに敏感。このまま、苗代においておくと、苗代で幼穂形成してしまう。それを取って田植えをすれば、妊婦に絶食大手術をするようなもの。不時出産、奇形児出産してしまう。稲も同じで、不時出穂、奇形出穂で、半夏生、半作となる、と話して、結論として、一日も早く、あるだけの池の水を水廻りのよい田んぼに入れて、そこに仮り植えして雨を待って、本田に移す案をす

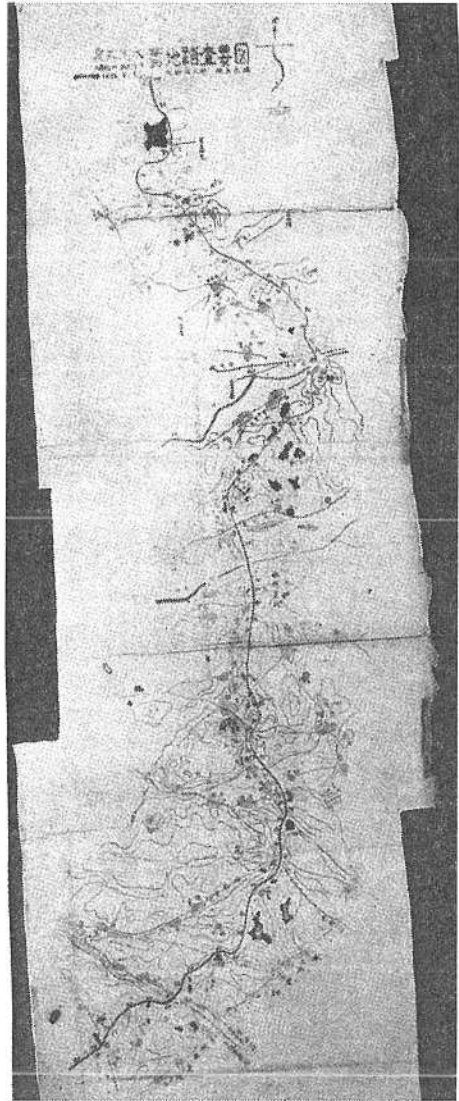
すめた。彼は実行となると早い。翌朝から、小学生まで動員して、村中総出で、仮り植えを始めた。私も半日手伝って、再び自転車で帰路についた。なんだか、後ろ髪をひかれる思いでペダルを踏んだ。

昔から言われている、木曾川からの導水はできないものだろうか。幸い地図はもっている。これはその時初めて考えたことではない。漠然とながら、要点は頭に浮かぶ。木曾川の標高一〇〇メートル付近にダムを造って、兼山付近から導水して可児川を越し、愛知県と岐阜県の県境を土田付近で越し、入鹿の奥を今井付近から坂下に抜ける案を考えていた。

こんなアイデアは、昭和十四年、第一松花江（スンガリ）の奥に長大な堤防を造り、その水を白城子の上流から、シラムリン河の下流の方に大興安嶺の東の大平原に面で流す計画をやったことを思い出して、何だか楽しくなって、ひまを見つけては自転車で歩いた。

それには付録がついてきた。それは、大山の山麓の県有松林で炭焼きをやること。ちょうどラツパ手の松下一等兵が東加茂の出身で、炭焼きが本職、県に私の先輩である酒井九二正がいるので、頼んで炭焼きの許可をもらって、炭を焼いて、生徒監（武官）、文官（陸軍教授）に配った。評判のよいこと、何が本職かわからなくなった。こんなことをしながら、木曾川導水の図面も次第に書き加えられていた。

昭和二十年の三月頃と思う。官幣中社、大県神社の祭礼に校長閣下の代参を命ぜられたので、こと幸いと後藤副官の乗馬、天龍てんりゅうを借りて行くことにした。それは自転車ではいけない所も馬なら行けると思ってお願ひして出かけた。馬は乗る人の乗馬術の巧拙をよく知っていて、歩兵科出身の私の乗馬技術を見くびって、なかなか思うように動かないので苦労したが、何とか、思う所だけは歩くことができた。参考のためにその図面を付記した。



用水計画最初の図面「実地踏査要図」
(浜島辰雄作成)

後藤副官は安城農林の先輩、特別志願の陸軍少佐。私より五歳年上、よい先輩を持ったものだ。

多くの戦友はみな、祖国の繁栄を願い、信じて死んで行った。祖国の元の姿となるのはいつのことか？ 終戦後、日本の復興は食料増産からと私はこの用水造りを畢生のライフワークとすることを誓った。

菅原用水の思い出

(阿久比町板山 山本孝平)

私は昭和十九年、二十二年の大旱魃に悲惨な痛手を受けた知多農民の一人であります。私の耕地は、いわゆる天水田が大部分です。兩年とも、私達の水源はすっかり干上がって、とくに私達菅原地区の溜池は、大正末期から続いた日照りで刃金が破れてしまっていた。戦

争中から戦後にかけての食糧増産に込め得るものは、わずかに天水田に植えつけた甘藷でした。敗戦に打ちのめされて復員した私達にとって、あまりにも荒れ果てた田畑でした。これはいかん、何とかして水がほしい、と思い続け、海部郡の十四山村の井戸屋さんに調査してもらったこともありました。

かくのごとく、水を求めて、とまどいつつ、私どもは時の耕地課技師に来てもらい、穿井のための準備指図を受けたことがありましたが、妙案はなく、改めて耕地課土地改良主任のお話をきき活路を見出しました。

それは谷間の底水を利用する教えを受けたのです。私達は文明の利器であるポンプを見落としていたのです。

ポンプ計画、高さ四〇メートルの高地へ三寸の鉄管三六〇メートルを敷設して揚水する大事業です。当時の私達にとっては破天荒な計画です。二〇馬力という原動機を使って揚水する大事業です。さっそく、受益者の集会をした。

時は昭和二十三年五月二十八日。衆議一決して、翌二十九日から工事に着手。仮運転竣工が六月十一日、その間、わずか二週間。夢に描いた水がとうとうとして飛龍のごとく四〇メートルの山上に流れ出した瞬間、思わず万歳を叫んでしまった。私は頬に涙して、気が狂ったように、峰を流れる水を追って走り出しました。幸いにして受益者一同、強固なる団結力は短日月に夢を実現化したのでありました。

当時、農地法の施行と供出の割り当ての重荷は、われわれ天水田持ちの百姓には、はなはだ不公平なものであり、場合によっては働く意欲さえも失わせる人が出るくらいであった。

私は関係の人に、上田を買うつもりでやろう。一反一万円の事業費を投入するつもりでも



浜島幸平

上田の働いに比較すれば、まだ安いもんだと自分にも考え、また人に話した。

昭和二十一年、二十二年の大旱魃に困り果てて、関係者の意欲はついに結合したのでありました。

この工事により荒地は数町歩美田化し、また、最近さかんに言われる畑地灌漑もやれるし、開墾もできました。その翌年度の植付けの終わる頃から愛知用水運動も軌道に乗り出したことを懐かしく思い出しております。

私もこの体験からおして、愛知用水の必要性と、用水が出来上がってからの利益の膨大さを思い、受益者が団結すれば用水はできるといふ自信をもって、及ばずながら愛知用水の推進力となるよう、農村同志会の一員として努力しているものであります。

大府町五カ村川よりの取水の思い出

(大府市北尾 浜島幸平)

大府市の東は境川を隔てて三河の明治用水の受益地である。境川は尾張と三河の境を流れる川であるが、境川が次第に天井川となり、豊明の東阿野、大脇、大府の北崎、横根。大府の水田が境川へ排水できなくなったので、上記五カ村が共同して東浦の森岡、緒川にお願いして、境川沿いに海に排水する専用の排水路を作った。この川を五カ村川と言った。

この川は、それぞれ用地幅に応じて、五カ村が共同して地主側に年貢を納める、非常にややこしい規定が作られ、大正の末期頃まで海の満干潮の影響が大脇付近までであった。平常は排水不良の川で、洪水となると、それぞれの村の境界の^{いり}木の流量を制限する複雑な川で、平常は畦越しするほど、水が流れていた。

昭和五年に安城農林学校を卒業して、大府の農業のリーダーであった私は、昭和十九年の

大旱魃、続いて起こった、昭和二十一年の旱魃に懲りて、一案を考えて昭和二十二年も春から雨が少ないので、今の新幹線の通っている付近で五カ村川を堰き止めて、そこに溜まる水をポンプで汲み上げて利用しようと、青年同志会で川を堰き止めた。ところが、昭和二十二年の大旱魃の時には、阿野も大脇も水不足、一滴の水も流してこない。せっかく造った堰の上の水路は蟻が這っていた。上流大脇に行つて、水を流してくれと言うわけにもいかず、とんだ悲喜劇となつてしまった。

(註Ⅱ 浜島幸平氏は、その後大府の農村同志会長として、愛知用水運動の急先鋒であったが、早世、愛知用水の水の流れる姿を見ずに亡くなられた。惜しい人を亡くした)

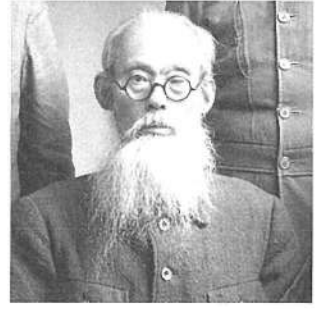
4 木曾川疏水計画に立ち上がる

山崎邸のつつじの会

山崎延吉先生は例年五月五日、愛知県の篤農家を集めてつくつた研農会の有志に、農業の計画、農業の方針などを語る会を催された。昭和二十三年の当日は、幡豆郡横須賀の鎌田由一(註1)の小麦の移植栽培について語る計画になっていた。過日、鎌田の圃場(ほじょう)において検見(けんみ)の会が催され、一反あたり十五俵は間違いなく取れるという太鼓判が押されて、今日は顕彰会みたいであった。県内から多くの会員が集まり各種の話に花が咲いた。

例年のごとく当日も出席した久野庄太郎さんは期するところがあつて、やや緊張気味で人の話を聞いていたが、一応の話の終わった頃、やおら立ち上がつて、

「今日は私の一生の決心を話したいと思ひますので、よく聞いて下さい。いま皆様の話を



山崎延吉先生

聞いていると、いろいろ新しい計画を立てておられますが、私の方では計画を立てても実行できるかどうか、お天気次第です。農業計画の中心は何といつても田植えであります。皆様の地方では用水があつて、いつから水を流し、何日に代掻きしろかをして、何日に田植えを始め終わるか計画通りにできますが、私の方では、悲しいかな、雨次第で、いつから田植えをし、いつ終わるか、お天気と池の水と相談して計画を立てねばなりません。これは人間業わざでできることではありません。そこで私は今日を限りに農作業を家内にまかせて、木曾川から知多半島への用水造りに専念したいと思ひます。もちろん大事業で私一代ではできないかも知れません。あるいはできなくて、後世の人の笑い種となつて死んでいくかもしれません。私はいま四十九歳です。親爺が六十九歳で死にました。私の定命が六十九歳として、今から二十年間命がけて運動をして、用水の幅杭でも打つていただければ、満足して死んでいけると思ひます」

と決心を述べた。多くの同志は、「それは大変むずかしい仕事だ。とてもできる仕事ではない」「都築彌厚さんの二の舞いだ。止めたほうがよい」と、先行きを心配して止めた。

その時、山崎先生は、厳然として、

「久野君、君の話は前から僕に何回も話した。男が一旦決心したからには、やるがよからう。わが輩も長年にわたつて、各地の農業経営改善を指導してきたが、用水を造つて経営改善することは考えてもみなかった。しかし大事業である。しかるべき専門家に技術的に可能かどうかを聞いてみる必要がある。技術的に可能性があるなら、我が輩も余生を傾けて、協力しよう」

と激励された。

技術的に可能か

山崎延吉先生の激励に感激した久野さんは、翌五月六日、まず農林省京都農地事務局名古屋建設部（名古屋市役所の西にあった）の遠藤虎松部長の所に出かけた。彼は戦時中の大政翼賛会当時から知り合いで、意見がよく合ったので直接訪ねた。遠藤部長は、「それは、まず県に相談すべき問題だ。県農地部長宮下一郎のところに行くのが本筋だ」と言った。県農地部の人脈についてはよく知らないので、農務課の杉山卓すくもに、農地部長宮下一郎を紹介してくれと頼んだ。杉山はさっそく農地部長を紹介してくれた。部長は、翼賛会の理事であった久野さんをよく知っていた。

そこで久野さんは、「ご存知と思うが、知多半島は用水がなく、旱魃で困っている。私はこれを救うには、木曾川から用水を引くよりほかに道はないと思う。そこでこの用水造りが技術的に可能かどうか、専門家の意見を聞きに来た」と来意をのべた。そこで宮下部長は耕地課の調査係長三好富雄、係員山田千里を呼んで同席のもとに県としての意見をのべた。

「県は終戦後のいま、食糧増産と復員軍人並びに海外引揚者の入植のために三川計画を緊急事業として進めている。三川計画というのは、豊川用水の建設、矢作川用水の整備、木曾川下流の開発である。その細部については、それぞれ担当から説明をさせます」と言って三好係長、山田係員が説明をした。

- (i) 豊川用水の建設は、戦前から着工していた計画で豊川と天龍川の一部の水を利用して、豊川の上流に宇連ダムを建設し、不足分を天龍川の水で補って、高師、天伯の旧軍用地の開発と渥美半島を中心に蒲郡を含む東三河平野の開発である。

(ii) 矢作川水系の開発は羽布ダムの建設、明治用水、枝下用水の整備、西三河平野の開発である。

(iii) 次は木曾川下流の用水計画で、尾張東部知多半島への疏水であるが、技術的可能性は充分にあり、効果もはかり知れないが、事業費が膨大で、国営事業として、推進することを期待している。

これに久野さんは力を得て、翌日山崎先生の家^に報告に参上。

「技術的可能性は充分にあり、その効果もはかり知れないものがあるが、事業費が膨大で、県としては国営事業として推進する考えであるとのこと。私は身命を賭し努力する決心です。どうか、先生の格段の御支援をお願い申し上げます」

とお願ひし、山崎先生から、

「よし、やろう」

と快諾をいただいた。

あくまで農民運動として——県農業会知多郡支部

県農業会知多郡支部には、すでに木曾川用水の話をしてあるので、五月八日に、五月五日以来の経過の報告をした。

県農業会知多郡支部長渡辺鎌太郎、同事務局長田村金平（安城農林学校十二期卒）、同次長明壁京一あすかに対して農林省京都農地事務局名古屋建設部長遠藤虎松、愛知県農地部長宮下一郎から受けた「事業の技術的可能性」について報告し、山崎先生から援助の御快諾をいただい



中川益平

たことを話した。

田村金平事務局長の意見はこうであった。

「この事業はあくまで農民運動として進める。そのため、市町村長を先頭にして、農村同志会が後押しで進めるべきである。知多のことは、今まで半田市が先頭に立ち、市町村が一体となって事業を進めてきた。

今回も、半田市市長森信蔵を先頭に、知多半島の町村会長中川益平（武豊町長）を中心に運動を進めるべきである。幸い、中川益平は、安城農林学校で私の一期上であり、山崎先生の直弟子である。私もよく知り合った仲であるので、武豊町長中川益平を訪問して、意見を聞いて、同氏を中心にして、知多郡の町村会に働きかけ、知多一市二十五カ町村が一体となって強力な運動を展開すべきである」

知多町村会の取りまとめは、愛知県知多町村会が統轄しており、その組織は次のようである。

半田市 市長 森信蔵

知多郡 愛知県知多事務所長 森山貞之丞

事務局長 大岩忠一

農地課長 青木竹三郎

第一部落 武豊町、富貴村、阿久比村、東浦村

中川益平（武豊町長）

第二部落 有松町、大府町、大高町、上野村、横須賀町

高津元治（横須賀町長）

第三部落 八幡村、岡田町、旭村、三和村、大野町、鬼崎村、常滑町、西浦村、小鈴谷村

滝田次郎（常滑町長）

第四部落 野間町、内海町、豊浜町、師崎町、河和町、日間賀島村、篠島村

大松逸郎（師崎町長）

第一回現地調査（昭和二十三年五月二十一、二十二日）

田村金平は阿久比村卯坂の生まれ。山崎延吉校長を慕って、安城農林学校に学んだ、山崎の直弟子。愛知県農業会の生え抜きの技師、郡下の農民に慕われて、県農業会知多郡支部事務局長。

明壁京一は小鈴谷村大谷の農家に生まれ、半田農学校に学び、知多郡支部の事務局次長として、郡下の農村となじみ深い、青年農業技師。

田村金平は、久野庄太郎さんに、「木曾川からの用水運動は一過性のものでなく、今後長い活動と、地域全体の運動となると思う。それには、計画の現地をよく知っておらねば自信が持てない。明壁次長を同行させるから木曾川上流の取水点付近の現地を見ておくことが大切だ」とすすめて、五月二十一日から二日間の予定で現地調査をすることにした。

県で聞いたところによると、木曾川の最下流発電所、今渡付いまわたりに近から取水する計画になるだろうとのこと、当日は名鉄線、犬山駅から御嵩行きに乗りかえ、今渡で下車、徒歩で日本



明壁京一



田村金平

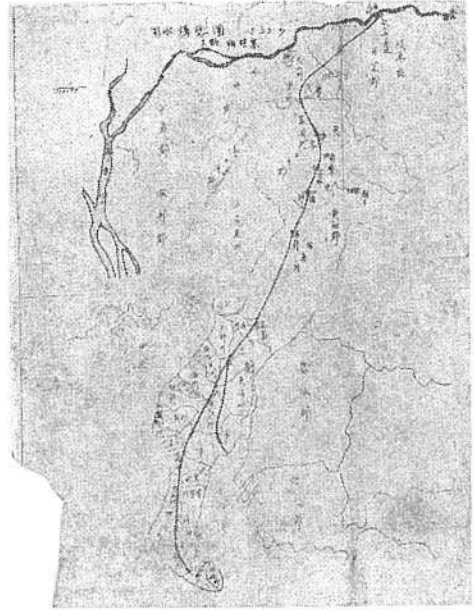
発電電の今渡発電所に十五分くらいで到着。久野さんは初めてのことで、外国に行くような気になって、新しい革靴を買って履いて行った。が、靴ずれができて藁草履わらぞうりを買って履いた。まず驚いたのは、木曾川に水が沢山あることと、発電所の施設の立派であることであった。所長の高橋正一に会って、「私達は、木曾川の水を知多半島に引いて用水を造りたいと思って、最初にこの発電所を見に来ました」と挨拶した。高橋所長は、あまりのことに気が変なわけではないかと思ったという。しかし、言うこともまともだし、気が狂っているわけでもなさそうなので、木曾川のことや発電のことを詳しく親切に話してくれた。

「まず、木曾川には、水は沢山あるようであるが、農業用水、水道用水、発電用水と水利権があつて、簡単には分水することはできない。発電にすれば、一立方メートルの水でアンモニアがどれだけできるとか、下流の農業用水（木津、宮田、羽島、佐屋川用水など）の許しが必要ならば、上流からは一滴の水といえども取ることができない」

二人は夢にも思っていなかったことで、木曾川に行けば、水は沢山あつて、自由にいくらでも水がもらえるものと思つて来たので、ただ驚くばかりであった。

高橋所長は気の毒に思つて、「アンモニアは木曾川の水でなければできないものではない。どこの水でも電気さえ起こせばできる。しかし、知多半島に水を持って行くには木曾川しかない。だが、この今渡では水位が低すぎる。どうしても、この上の兼山発電所くらいから取水しないと持つて行けないでしょう」と教えてくれた。

そこで、二人は兼山発電所まで見に行くことにして、木曾川の左岸の道を伏見、兼山と進み、木曾川は伏見付近から大きく北方に流れを変えて、兼山の町筋の西方を溪谷になって流下している。高橋所長に教えられた通りに進んで、兼山発電所に到達し、木曾川用水の取水



用水構想図
(昭和23年7月21日、久野・明壁案)

点となると思われる付近をつぶさに視察し伏見まで引き返した。

久野さんは靴ずれして、靴を肩にぶらさげ藁草履をはいて歩いた。道行く人々はなんと変な人達だと見返して笑っていたが、こちらは真剣であった。そして、田植えが終わったら同志会の人々に現地を見せて用水運動を盛りあげねばならぬと考えた。

後日、伝え聞いたのであるが、高橋正一所長は、支社長より、

「親切はいいけれども、用水となれば、これからも百姓たちが訪ねてくるだろうが、素人に深入りさせるような話はしないように注意してもらいたい」

と、お叱りをうけたとのことであった。しかし、所長の話で「川の水」がいかなるものであるかを教えられ、用水運動の一つの指針を得ることができた。高橋所長に感謝いたしたい。

運動の指導者に緋田工を迎える

久野庄太郎さんはあらかじめ田村金平らの了解をとって、昭和二十三年六月の初め頃、用水運動の指導者として緋田工あけだたくみを迎えることにした。

この運動は、県はもちろん、国の行政組織に精通した人の指導が必要で、一つの陳情書を書くにしても素人ばかりではだめだと考えて、翼賛会当時知り合った人の中で心にとめて



緋田 工

いた人があったので、終戦後どうしているかと尋ねてみたら、東京に還らず、愛知県幡豆郡の宮崎で、同志と共に製塩事業を興そうとしているが、思わしくいっていないようだとのことだったので、会って木曾川用水の主旨を話した。その人が、岡山生まれの緋田工（二八九八―一九六八）という人で、独学で警視庁の警察官となり、さらに特高警察官となって敏腕をふるい、企画院創設のおり、時の実力者であった岸信介に認められて、終戦前、愛知県下の航空機生産の督励ために中央より岡田資東海軍管区司令長官の幕僚として派遣されてきていた。

緋田は話を聞き、「大変な事業だと思えるから、自分自身にも事業推進の自信はない」と言ったが、久野さんの「自分一代でできなくても、後世の人が引き続いて完成してくればよい。戦に敗れた日本の復興の道は自分達の力で地域地域の経済力を高めるしか方法がないと思う」という一言に感激して、「では、お手伝いをしましょう」と快諾してくれた。

久野さんも喜んで、「いま、次弟が大阪に行って五万羽養鶏を始めており、分家の家が空いているから、知多に移転して腰を落ちつけてやって下さい。生活の問題は私がいろいろ考える」と言って、「とりあえず、用水運動の久野庄太郎の私設顧問という形をお願いします」ということにした。

5 同志への働きかけ

同志会開催の下相談（昭和二十三年六月二十五日）

例年のごとく、六月下旬は田植え準備、田植えで猫の手も借りたい時期である。久野の家

は五月五日以来、^{くわがしち} 鋤頭の庄太郎さんが農作業に手出しをせず、妻の「はな」が一切を取りしきっていて、まだ田植えも終わっていない家で相談事もできないので、朝倉の魚屋旭屋の二階を借りて同志会の打ち合わせをすることになった。もちろん、費用一切久野さん持ち。なぜ、そんな忙しい中で打ち合わせをするのかというと、百姓は田植えの最中に会合を開いてもなかなか出て来ない。そこで、田植えが終わったらすぐ同志を集めて相談ができるように準備しておく必要があるからだだった。

そこで、六月二十五日、次の人達と朝倉の魚屋の二階を借りて、農村同志会を開く下相談をした。

集まったのは左記の五名であった。

木曾川用水発起人

久野庄太郎

愛知県耕地課調査係長

三好 富雄

愛知県農業会知多郡支部事務局長

田村 金平

同次長

明壁 京一

久野庄太郎の私設顧問

緋田 工

〔決定事項〕

- (i) 田植えが終わったら、農村同志会の総会を開き、同志に用水建設を訴える。
- (ii) 半田市長に運動の中心となってもらおう了解を取る。半田市長森信蔵。

- (iii) 農業協同組合（農業会）に協力してもらおうよう訴える。半田市農会長渡辺鎌太郎（農業協同組合は設立中）。
- (iv) 郡町村に運動の中心母体になってもらうよう訴える。知多郡町村会長武豊町長中川益平。
- (v) 以上の結果をもって、県、国会議員に働きかける。

昭和二十一年に発足した知多農村同志会の設立の経緯とその性格についてのべてみよう。戦前、大政翼賛会の下で、愛知県下の食糧増産、農民精神の高揚の尖兵となる篤農家が研究会を組織した。戦後は研農クラブと衣替えして、農業技術の浸透、農民精神の高揚、農地改革の推進、農業協同組合の育成など協力した。

知多郡においては、その組織を知多農村同志会と命名し、市町村単位に支部を持ち、熱田神宮のお供えもの奉仕母体、豊年講とも表裏一体となり農業経営、農地改革の推進に協力した。初代の会長は久野庄太郎、副会長に河和の野田虎吉が選出されて知多農業発展に貢献してきた。

昭和二十一年五月五日、第一回の総会を半田農学校にて開き、知多農村同志会の会則^(註2)を決定し活動に入った。

森信蔵半田市長に期成会会長を依頼

かねてこの用水運動の事務局長を自任している田村金平は、知多半島のことは半田が中心となつて、町村が団結してことをすすめるならわしとなつているので、田村は渡辺鎌太郎知多郡農業会長に了解をとつて、久野さんを帯同して半田市長森信蔵を訪問した。そして、去



森 信蔵

る六月二十五日、農村同志会の総会を聞くための準備会で決議した用水建設運動の会長を引き受けてもらいたいとお願いした。

森信蔵は、戦前若くして渡米し、アメリカのカリフォルニア大学を卒業し、四十年間にわたって日本字新聞の記者として名声を博していた。しかし、日米間の外交上の経緯が芳しくなく、先を見越して帰国。戦中はアメリカのスパイではないかと誤解を受けたこともあったが、戦後、市長に立候補して日米間の融和に努力した。毛並の変わった市長であった。

久野、田村は、木曾川疏水の計画を説明し、その建設運動の会長をお願いしたく参上したことを話すと、市長は、アメリカにおけるフーバーダム、インペリアル平原の開発の話を持ち出し、「日本の戦後復興のためには、まことに時宜に適した計画である」と、逆に激励されて、快く用水運動の会長となることを引き受けてもらった。

中川益平武豊町長には用水運動の副会長を依頼した。中川武豊町長は、安城農林十一期生で田村金平の一年先輩。中川家は武豊の旧家で、長成池を建設し、新田を開発、地元の開発につくされた。木曾川用水の開発には当初から賛成であり、町村会長としても用水建設に賛成、山崎先生からも連絡があり、知多郡町村会長として、地元をまとめる最適任者であった。

農村同志会総会開催（昭和二十三年七月五日）

前述のように、各方面の協力準備が出来上がったので、農村同志会の第一回の説明会が武豊駅前の食鶏処理場において開催された。

〔出席者〕

大府町	山口治兵、加古与市
東浦村	水野源式（農協専務）、平林利
阿久比村	山本孝平
上野村	石田季之、本田佐久治、小島正雄
横須賀町	神谷甚九郎
八幡村	久野庄太郎（会長）
武豊町	坂口善夫
常滑町	稲葉忠雄、中野三一
河和町	富谷茂吉、榊原文英、橋本栄一、野田虎吉（副会長）
内海町	大岩源平、石黒新三
豊浜村	山下秀夫
野間村	渡辺万吉
事務局	田村金平、明壁京一、澤田ゆき江（書記）

今後同志会が中心となり、出身町村の農家への計画の浸透、推進をはかる。

（イ）運動方針は、あくまで農民への趣旨の普及徹底をはかること。

（ロ）運動者自身は私利私欲をはなれ、清潔な運動をはかること。

（ハ）そのため、自身の運動費は自弁を建前として、その他はなるべく篤志家の喜捨による
浄財に頼ること。

安積得也岡山県知事らの協力

昭和二十三年（一九四八）七月十五日、当時岡山県知事として在任中で、数々の業績をあげていた安積得也さんが来訪。久野家分家にて用水に関して意見統一をはかった。安積さんは愛知県経済部長時代の知己が多く、本人の信条は「わが立つ所を深く掘れば、必ず泉あり」で、用水建設を推奨された。この会には左記の人々が出席され、それぞれ、提言が行われた。

深津玉一郎（衆議院議員）—— 報道人を利用すべきだ。

田中いと（愛知県議会議員）、古川ゆき（知多連合婦人会会長）—— 婦人層に浸透をはかれ。

森勇（愛知県議会議員・同副知事）—— 市町村長に話をせよ。

宮下一郎（愛知県農地部長）—— 技術的に可能な計画である。

田村金平・明壁京一—— 郡農村同志会にはかれ。

緋田工—— 農民の力を結集せよ。

昭和二十三年七月十七日、中日新聞記者与良エが戦前の大政翼賛会当時久野さんと面識があったので、彼を通して、河和の角屋に各社の報道人（中日、朝日、毎日、NHKなど）を招き、記者会見、用水建設に知多農民が立ち上がった旨伝え、七月十八日朝刊で各社一斉に報道された。その反響は大きく、中部地区で大きな話題となった。

(註1) 山崎延吉(やまざき のぶよし)。一八七三〜一九五四。金沢市生まれ。農民教育家、農政家。一八九七年東大農科卒。福島県立蚕業学校、大阪府立農学校の教師を経て一九〇一年新設の愛知県立農林学校(のちに安城農林学校)長となり、〇五年同県農事試験場長、農事講習所長などを兼務した。〇八年『農村自治ノ研究』を著し、「国家を興隆させるためにはまず地方自治体の繁栄を考え、その根である農村の振興に力を注がねばならぬ」と、「教育の社会化」を唱え、自ら、全国を行脚してまわった。

一〇年渡欧、各地で協同組合、地方改良事業などを視察・調査、その体験をもとに、全国篤農家懇談会などを開き、産業組合、農事講習などの普及と育成につとめた。また、農作業の協業化、品種改良、技術改良、多角経営などにもつとめ、ヨーロッパの実利主義、合理的経営から学んだ農業経営を説くとともに実践した。愛知県碧海郡地方(現・安城市・刈谷市・豊田市南部・知立市・高浜市・碧南市・西尾市・岡崎市ほか)は、山崎の指導によって「日本のデンマーク」と呼ばれ、先進的模範的農業地帯として知られた。

一方、疲弊する農村地帯の農民を鼓舞する目的で彼は「農は国の基たる」自覚を持たせようと「農民道」を説いた。二〇年、帝国農会の主席幹事に就任し活躍。二八年、第一回普選で衆議院議員に当選、尾崎行雄を顧問として鶴見祐輔らと六名で「明政会」を結成、小党でありながら議会のキャスティングボートを握り、重要な役割を果たした。

二九年、三重県石薬師村に「我農園新風義塾」を設立、数多くの農業の中核的担い手や指導者を育てた。戦後は四五年、東海毎日新聞社社長、四六年貴族院議員。四八年より愛知用水建設計画に参画。

『昭和の二宮尊徳』 『農聖』と多くの農民たちから慕われた。

(註2) 『知多農村同志会の会則』 於半田農学校 昭和二十一年五月五日

第一章 名称と構成

第一条 本会は、愛知県知多農村同志会と称し、郡内市町村の同志を以って組織する。

第二条 本会の事務所は、愛知県農業会知多支所内に置く。

第二章 目的と事業

第三条 本会は理想農村建設のため、農民同士の意思疎通を計り、理想農村建設の事業の推進を図るを目的とする。

第四条 本会は第三条の目的を達成のため、左記の事業を行う。

- 1 農業技術の浸透を図る。
- 2 農業精神の昂揚を図る。
- 3 農政に関する事項。
- 4 その他。

第三章 機関並びに運営

第五条 本会は理事（委員）九名、監事二名を置く。理事、監事は、本総会において選任する。理事は会長一名、副会長一名を互選する。

第六条 会長は、本会を代表し、事務を総理する。会長事故あるときは副会長之を代理する。

第七条 委員及び監事の任期は一年とする。但し再選を妨げず。

第八条 本会は、職員若干名を置き、会長の命により庶務に従事する。

第九条 本会は顧問及び参与を置くことを得。顧問及び参与は総会において推薦し、会長これを推戴する。

顧問及び参与は、会長の諮問に応え、事業について意見を開陳するものとする。

第十条 本会の総会は定期と臨時の二種とし、定期は毎年四月之を開く。総会は委員会を経て会長之を招集し、総会の議長は会長之に当る。

第四章 会計

第十一条 本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第十二条 本会の経費は、寄付金、其の他の収入を以つて之に当て、本会一会員の負担は二円とする。

第十三条 本会の予算は総会において決議するものとする。

第十四条 経費の決議は、総会において報告し、承認を受けるものとする。

第十五条 本会の会則は、総会において、三分の二以上の同意あるに非ざれば、変更するを得ず。

当日総会において、左記役員が選出された。

会長 久野庄太郎（八幡村）

副会長 野田虎吉（河和町）

顧問 渡辺鎌太郎 榎本誠

参与 田村金平（事務局長） 明壁京一 緋田工 澤田ゆき江（書記） 委嘱